

現代インド語辞書編纂の最前線 (マラーティー語の場合)



海外交流

高橋 明*

From the Forefront of Modern Indian Language Studies
A Marathi-Japanese Dictionary

Key Words : Marathi Japanese Dictionary

現在、大阪大学外国語学部だけに限らず日本語母語話者がヒンディー語を深く学ぼうとするとき、古賀勝郎大阪外国語大学名誉教授が編纂した『ヒンディー語＝日本語辞典』（古賀勝郎、高橋明、大修館書店、2006年）が、その机上にある。そもそも辞書編纂は文系のすべての学問にとっての基礎研究にあたり、教育研究の発展にとってなくてはならない存在である。それ故に、大阪大学外国語学部が担い続けて来たその存在意義の根幹に備わるDNAとも言えるべきものでもある。英語、スペイン語、ドイツ語、中国語など日本における学習者の多い言語は言うに及ばず、学習者が必ずしも多いとは言えないものであっても、本邦において研究・教育の対象とされている世界の多様な言語について、辞書編纂につながる作業は外国語学部の中で、常に、どこかで、誰かによってなされてきている。しかし、後者のような学習者の比較的少ない言語については、優れた仕事が行なわれていながら、当面の社会的な需要の点から、研究者の努力が出版、刊行という形で報われることに大きな困難が伴っている。これはすべての科学研究の基礎となる重要な仕事でありながら、しばしば光が当たらないことがあると言われる基礎科学研究の分野と似ているところがあるのかもしれない。また、言語は常に新しくなっている。その意味で現代語辞書編纂は言語にかかわる最先端の研究で

あるとも言える。本稿では私が現在取り組んでいるマラーティー語＝日本語辞書編纂について述べることにする。

ところで、冒頭で挙げた『ヒンディー語＝日本語辞典』の場合、A4版で1,400ページを超えるこれほどの大辞典の刊行が今の厳しい出版事情の日本で可能となったのは、日本の言語関係出版社を代表する大修館書店の理解があったことは言うまでもないが、同時に辞典の版組にあたってTeXを採用することで経費を最小限に押さえることができたことが大きかった。もちろん、そのことは著者である古賀勝郎名誉教授とその第一の協力者（ここでは古賀捷子令夫人）による組版作成作業がそれだけ困難かつ膨大なものとなったことを意味している。以上は、辞書編纂という基本的には昔から今に変わらない個人の地道な基礎研究の積み重ねによる労苦の成果が、さまざまな新しいソフトウェアの助けを得て目に見える形と成った一例でもあったかと思う。私自身もマラーティー語＝日本語辞書の編纂作業のために、現在このTeXを使用している。

インド系言語の本格的な日本語対応辞書編纂の歴史は、明治以降に古典サンスクリット語研究が本格的に着手されたときから始まる。サンスクリット語、パリー語については、日本人研究者による成果はいくつか刊行されているものの、英語、ドイツ語などいわゆるインド学の先進国であった西欧の研究者の手に成る優れた辞書がすでにその時点で存在しており、現在も本邦の学習者はそれら先行する辞書類をもっぱら頼りとしている。インドの現代諸語についても、その状況は古典語と同様のものではあったが、近年、ベンガル語、パンジャービー語、スィンディー語などに関しても、日本人研究者の辞書及び語彙集編纂に関する業績については目立たないが優れた成果が積み上げられて来ている。



* Akira TAKAHASHI

1953年12月生
現在、大阪大学言語文化研究科言語社会
専攻 教授 Ph.D
ヒンディー語学・文学
TEL : 072-730-5294
FAX : 072-730-5294
E-mail : takahasi@lang.osaka-u.ac.jp

さて、インドの重要な言語にインド西部のマハラシュトラ州（州都はムンバイ）で話されているマラーティー語という言語がある。話者人口は約9,000万人を超え、インドでも第5位の大言語である。ヒンディー語と同じくインド・ヨーロッパ語族に属し、したがって英語やドイツ語、ペルシア語とも親縁関係にある。日本のマラーティー語研究は、東京のアジア・アフリカ言語文化研究所で活躍された先学の功績を引き継ぐ形で、現在は石田英明大東文化大学教授、小磯千尋本学非常勤講師、またブラシャント・パルデシ国立国語研究所教授などによる研究が着々と進められている。辞書編纂についても、パルデシ教授を中心として多くの日印の研究者による日本語・マラーティー語辞書、動詞研究などが進行中である。私の現在の仕事もこうした積み重ねの恩恵なくしては考えられない。

ところで、昨今のインターネット事情が言語学習のみならず辞書編纂作業をもある意味で一変させつつある。『ヒンディー語＝日本語辞典』の編纂時と比べてさえも、インターネット上で得られる情報の質と量には格段の差がある。現在、ネット上でインド諸言語に関する膨大な辞書類の検索が可能である。中にはすでに著作権の切れた古典的辞書をオンラインで自由に検索ができるサイトも複数あり、信頼性についても十分なものがある。マラーティー語に関しても、今は玉石混交ではあるが複数のオンライン辞書での検索が可能である。語彙収集についてはネット上での検索と連動させることによって、少なくとも量の点だけで見れば、従来の紙媒体資料をもとにカード作成へとといった語彙収集とは比べ物にならないほど少ない時間と労力で効率的に作業をすることが可能であろう。たとえばマラーティー語辞書編纂に欠かすことのできない情報の宝庫を提供してくれている、州政府が編集した浩瀚な『マラーティー百科事典』も今ではネット上で何の制限もなく誰もが自由に利用できる。かつては考えられなかった環境が出来上がっている。

しかし、なお辞書編纂にあたっての基本的な困難はやはり今もある。たとえば、マラーティー語母語話者が身近にある木、草、花、魚、鳥、虫、つまりありとあらゆる事物に付けた名称についての信頼できる学問的な事典、図鑑の類いが不足しているということがある。インドの事物に関する英語による事

典、図鑑類はさまざまなレベルのものがあるとしても、その場合でも、それら事典に収録された事物の英語の名称から、その学名を頼りにマラーティー語の語彙にたどり着くのは容易でない。また、一方でマラーティー語の現存する多くの辞書には、たとえば、その語彙について「木の一種」であるとか、「魚の一種」で済まされている語彙の何と多いことか。

辞書編纂作業が異なる文化間の出会いを経験する場となるのはこういう時でもある。現代インド諸語に関する日本語辞書編纂の際にしばしば絶望的と思わざるを得ないのは、たとえば昆虫類、魚類に関する和名の同定作業である。一般に動植物あるいは事物について、現在はネット上で検索をすればただちに実物らしきものの画像にたどり着くことがある。実見したことのない植物や物について言葉を手がかりにあれこれ想像するばかりで実物に至ることのできないもどかしさに悩むことなく、ああ、こういうものだったのか、とネットの画像を見て感嘆することが普通になってきている。それが実際のものである場合は確かにありがたい。しかし、その事物そのものを指す名称が捕えがたい場合がある。たとえばマラーティー語で昆虫について一定程度の語彙は確かに存在するが、それは日本語に比べれば比較にならないほど少ない。たとえばインドの都会で子供たちに頭上を飛んでいるトンボを指さして、あれは何と言うのかと尋ねると、「ヘリコプター」や「エアプレーン」という答えが返ってくる。確かに、トンボは空中でホバリングができるから、まさにヘリコプターだと感心したようなことである。もちろんインドのトンボもヒンディー語で भँभीरी (bhambhiri)、マラーティー語で चतुर (catur) という立派な名前を持ってはいるが、いずれもトンボ類の総称としての語彙であり、日本のようにたくさんのトンボに種別別に名前があるということはない。その他の昆虫についても細かい区別をしなければならないという必要性そのものをたいていのインドの人たちは感じていないようである。

とはいえ実際の辞書編纂作業の難事は事物の裏付けのない、それ以外の語彙の同定であり、正確な語義の記述にある。これはまさに今に変わらぬ困難な作業であり、その不可能を補うためにできるだけ適切な実際の用例の採録が大切になる。この時に必要になるのが対象言語の知識に加えて、日本語と日本

